

主 文
本件控訴を棄却する。
当審の未決勾留日数中参拾日を本刑に算入する。
理 由

本件控訴の趣旨は末尾添付の被告人本人並びに弁護人植木敬夫のそれぞれ差し出した各控訴趣意書記載のとおりである。

弁護人の控訴趣意第二点について。
しかし原判決の挙示する標目の各証拠を綜合すれば原判示 A、B 両巡査の被告人に対する職務質問は適法であり憲法第三十五条警察官等職務執行法第二条に違反するところはなく適式の公務の執行たること明らかである。すなわち戸塚警察署勤務警視庁巡査 A は原審第二回公判期日において証人として「私は昭和二十八年七月二十日から引続き捜査係刑事をやつており、主に窃盗関係を担当していたが、特に a 方面で窃盗被害が多かつたので B 刑事と密行していたが、同年十一月頃には聞込みなどで犯人は二十歳から三十歳の男が多くあまり風体のよくない職工か会社員くずれで背は五尺二、三寸から四寸程度と推定していた。十一月十八日も B 刑事と二人で午後一時すこし過ぎ b c 丁目の方へ行つたところ、私達が b c 丁目 d 番地先の三丁目の方から e 町に通じる道路に出ると被告人がどこから来たのか確定できないが、私達の約二十米位先を矢張り私達の行く方向、つまり e 町の方へ歩いて行くのだが、同人は風呂敷包みを持つて後を振り返り振り返りして行くのでおかしいなと二人で申した。同人の服装は新しくないレインコートを着て茶色つぽい靴をはいて直径二十糎長さ三十糎位の風呂敷包みを持つており、その時ほかに人はいなかつた。私達二人が路地から出て行くとか何かこちらを二、三回振り返つてそわそわした感じであつた。歩いている速さはその時すこし速足になつたようであつた。そこで私達二人はどうも変な奴がいるなあとつて職務質問をしようと思つた。その時私達は空巢の犯人でも見つかるかも知れないと思つて歩いて行つたのだが、同人は聞込みによつた空巢犯人に似ていたので職務質問をした。私達は速足で行き「もしもし」と言つて、「私は警察手帳を出し警察の者ですが、どちらへ行くのですか」と聞いたように思う。その時 B 刑事と私はその人を挟むような格好であつた。同人は雑司ヶ谷へ行くとか言つた。それで職業は何ですかと聞くと紙のブローカーだと言つた。どちらからお出でですかと聞くと高田馬場から来たと言つたように思う。その後持つていた風呂敷包みについて聞くと紙の見本ですと言つたように記憶している。それから失礼ですが包みの中を見せて下さいと言つたと言つた感じが顔色が變つたように思う。それで時計を急ぎますからと言ひ私達を残すようにしてさつさと歩き出した。その時ひよつとすると逃げかかつたのではないかと感じ、その包みが盗品ではないかと思つた。そして包みの中を見せて貰つていないしするのでも君、君と言つたがずんずん行つてしまふので一寸待つて下さいと言つた。B 刑事もそう言つたと思う。同人は普通よりも早い足で e 町の方にどんどん行つてしまふので私達の方で君、君というとその内ばつと走り出した。最初に職務質問したところから歩いたのは大体三米位と思う。こきざみに歩き出して私達の方で、君、君といつてううちにばつと走り出した。走り出してから目白駅の方に左に曲つて全速力で走つて行つた。それでおかしいなという気持ちが強くなつて追いかけて行つたのであるが追いかけてまた職務質問をするつもりだつたのである。B 刑事は私よりおくれて追いかけてきたがその道は舗装していない相当きつい登り坂であつた。私は同人に追いつき、始めは真後から追いかけたが前に出ようと思つた。その間何も言わなかつた。そして追いついた時、同人はくるつとこちらを向いて私の方にぶつかつて来た。そのため私はよろめいたが、その時右足の膝の関節の所を蹴つてきたのである。それで私は公務執行妨害の現行犯として逮捕しようと思つた。そこへ B 巡査が走つて来てその人を抱きとめ石垣の方に連れて行き君おかしいじやないか逃げが必要はないじやないかと言つたら同人はもう逃げませんと言つた。私達は署まで連れて行つて調べるつもりであつたが空巢のことを調べようと思つた。署へ連れて行く途中また逃げかけたので追いかけて行き組打ちになつた。そして手足をばたばたするので手錠をかけた。署の五十米位手前に来ると同人は高校生らしい二、三人の学生に向つて諸君この弾圧を見よと言つたので私達ははじめて思想関係の人ではないか、これはどうも窃盗の大物かと思つたのにとんだものをやつたなあ二人で話した」と供述しており、また B もまた前同公判廷において証人としてこれと同趣旨の供述をなしておるのであつて、これらの証拠によれば前記 A、B 両巡査の被告人に対してなした職務質問は警察官等職務執行法第二条所定の条件を具備するものであつてこれを目して職務質問の適法性の限界を越えたものであると非難するの

[illegible]

われている一切の事実を精査すれば論旨摘録の諸般の情状を斟酌しても原審の被告人に対する量刑は相当であり重きに失するものとは認められないから論旨は理由がない。

（その他の判決理由は省略する。）

（裁判長判事 中村光三 判事 脇田忠 判事 鈴木重光）